

氏 名 渡邊 一弘

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大甲第 1648 号

学位授与の日付 平成26年3月20日

学位授与の要件 文化科学研究科 日本歴史研究専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 戦時中の弾丸除け信仰に関する民俗学的研究
～千人針習俗を中心に～

論文審査委員 主 査 教授 小池 淳一
教授 常光 徹
教授 樋口 雄彦
教授 徳丸 亜木 筑波大学
名誉教授 大島 建彦 東洋大学

論文内容の要旨
Summary of thesis contents

本論文は千人針をとりあげ、多角的に分析することによって弾丸除け信仰をはじめとする戦争下のいわゆる「銃後の民俗」に関する考察をおこなったものである。

本論文は、研究の目的と方法および研究史をまとめた序章と、全体をまとめ、今後の研究課題を述べた終章のほか、4章から構成されている。第1章、第2章で千人針習俗の史的な展開過程をたどり、第3章は弾丸除け信仰としてのサムハラという呪的な文字に関する研究をおこない、第4章では民具としての千人針を考究している。

以下、各章の内容を要約する。

第1章では、明治期の弾丸除け信仰から、日露戦争期の千人針習俗とその後の普及、満州事変までの様相を新聞記事や講談などのメディア、実物の分析、婦人会の関与などに着目してその形成過程を論述している。

第2章では日中戦争以降の千人針習俗の全国的な展開を、演劇・小説・浪花節・落語さらには映画やレコードといった多種多様なメディアに描かれていくことを取りあげて分析を加えている。またオナリ神信仰との関わりから沖縄地方の様相を検証している。千人針の作成については婦人会や女学校との関わりを論じ、さらに浄土真宗や神社信仰において千人針がどのように扱われてきたかを検討し、太平洋戦争末期までのこの習俗の消長をたどっている。

以上の通史的な検討に加えて、第3、4章は民俗信仰と民具という観点から千人針を分析している。

第3章では、近世期には怪我除け、虫除けなどに効果があるとして流行ったサムハラに関する俗信が、明治に入って、日清・日露戦争で弾除けの呪いとしての意味を帯びるようになり、さらに、千人針習俗に取り込まれていった経緯を明らかにしている。

第4章では全国各地の博物館が所蔵する千人針を調査し、戦争の民具という視点からの分析を試みている。千人針の形態や素材、付属品などに即し、文献資料や絵画資料からは読み取れない特徴を、実物資料を通して浮き彫りにし、さらに聞き書きによるデータを加味して、その実態を明らかにしている。

結論として、千人針の推移を要約し、千人結から千人針への転換、満州事変以降の変化、日中戦争開戦以降の俗信の付加などをまとめ、出征する者への感情を込める道具としても機能したことを指摘した。また、今後さらに考究すべき課題についての整理も行われている。

博士論文の審査結果の要旨

Summary of the results of the doctoral thesis screening

審査の結果、本論文の学術的な成果は以下のようにまとめることができる。

千人針習俗については、既に大間知篤三、宮田登、岩田重則等により、ムラから国家へと拡大された合力祈願としての性格や、女性霊力や赤の呪力との関わりが指摘されてきた。しかしながら千人針習俗に的を絞った本格的な研究は、本研究が初めてのものであり、極めて丹念に編纂された本論は高い資料的価値を有する。また、資料の分析により、千人針に先行する「千人結」においては、糸は赤色に限られていなかった事を示し、通説とされてきた赤色の呪力と千人針習俗との関連を批判的に検討し、宮崎神宮神職の社務日誌等の分析から、先行研究では、十五年戦争の終わりには行われなくなっていたとされていた千人針習俗が地方では継続されていた事を実証するなど、新たな知見の提示がなされている。

こうした千人結、あるいは千人針という一つの呪術的合力祈願行為は、民衆のレベルにおいて、単純に人から人へと伝播・継承されたのではなく、新聞や雑誌の記事や小説、それに付随する挿絵や写真などの図像、落語や講談などの大衆娯楽やメディアなどに取り上げられ、その行為に対する解釈が併せて提示される事により、日中戦争などの時代を背景としてさらなる流行を呼び、それが再び民衆の千人針習俗へと回帰的に取り込まれたものであることも明らかにされている。さらにそれが、女学校での戦時教育の場に受容され、モノとしての「千人針」が製品として大量生産されて行く過程が解明されていることも重要な成果である。千人針習俗という祈願行為は、その基層では、民衆による呪術的な合力祈願に基づきながらも、その展開は常に各々の時代層におけるマスメディアによる情報流通や政治権力の意向と不可分のものである事が本研究では明らかにされており、時代の流れのなかでその変遷が明らかにされているのは大きな達成といえる。その点からは、従来「民間信仰」や「民俗宗教」の言葉で括られて来た近現代の民俗事象や信仰伝承に対する研究視角を今一度問い直す論考であると高く評価できる。

また方法論的にもモノとしての千人針に徹底的にこだわり、それから読み取れるデータと聞き取りによって得られた情報や関連する文献からの裏付けとを見事に統合して研究を展開している点は、モノ資料すなわち博物館資料から広がる学術研究、特に戦争研究の可能性を証明した好例といえる。戦時に関する聞き取り調査が時間的限界を迎えている現在、モノ資料を孤立させないためにも本論文のような手法は重要なものといえよう。

全体として本論文は、単体の資料としては、これまで本格的な研究がなされてこなかった千人針に関し、その前史から明治の発生期、敗戦による終焉までを扱った通史的研究であり、また民俗学・歴史学を架橋する総合的研究として意欲的なものといえることができる。

しかしながら残された問題、さらなる考察を要する点も少なくない。

本論文においては、千人針を作った側、送った側からの分析が中心となっているが、千人針をもらった側、すなわち兵士たちについてはより深い考察が行われてもよかったのではないか。兵士が記した日記や軍事郵便、回想録などから判明することはないか。兵卒と将校の違い、陸軍と海軍の違い、敗戦後の所持や処分の方、あるいは軍上層部の考え方などの解明が今後の課題として残されている。また千人針の展開についても日露戦争から満州事変までの間の時期についての資料発掘は必ずしも充分ではない。この時期にも第一

(Separate Form 3)

次世界大戦やシベリア出兵などがあり、千人針が存在した可能性は高い。

民俗研究としては、「戦争の民具」というカテゴリーについて本論文では十分に尽くされているとは言えない。モノとしての千人針は、大量生産によるものを除いて「信仰民具」にあたるものと考えられるが、戦時下という時代状況やメディアによる情報の流布とも極めて深く関連するものであり、より詳細な検討が必要と思われる。今後は「戦争の民具」、あるいは「戦争民具」としての概念化を求めたい。

さらに第4章において、聞き書きによる一次資料が提出されているが、一部はそれまでの考察に生かされているものの、十分に分析され、位置づけられているとは言い難い。貴重な一次資料の収集を基点に、「銃後の民俗」の民俗誌を志向し、生活全体のなかで千人針がどのように位置づけられてきたかを探ることも可能ではなかったか、とも思われる。

しかしながら、こうした課題は本論文の達成に基づき、新たに見通すことができたものであり、多様な史資料を博搜して、多角的な考究を試みた本論文の価値を損なうものではない。以上により、本論文は博士の学位を授与するに値するものと審査委員全員一致で判断した。